

空手道詳説（46）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その7、琉球の言語と文化）

（2）空手と沖縄の言語

サ 空手と沖縄語

4) 空手で使われる沖縄の言葉（方言）・・・その1

空手に関する書物は、指導書ばかりでなく小説といったまで多く出版されている。

それらを読み進めると、標準語ばかりでなく沖縄の方言（以下、この項では単に「方言」と記す。）による表記や振仮名（ルビ）に出会う。方言を使った方がより真意が伝わるからに相違ない。この表記や振仮名は、読み慣れると心地良い響きとなって胸に止まり、言葉への愛着とともに温かさを感じ、書いた人の主張が身近になってくるから不思議である。

筆者とて多数の空手関係書に目を通した訳でないから、限られた中で語り述べられないが、気付いた幾つかを選び説明を加えてみたい。しかし、根拠とした書物の時代背景は、空手が未だ「手」（ティー）と呼ばれていた時期のものが大方であり、更に、これらの言葉が現在も指導で使われている場面は多くはないであろう。

また、この記述を目にされる沖縄県の先生方から、笑止と苦言を呈されるのも覚悟の上、意を決して認めたので助言を頂ければ幸いである。

記述に当たり「形」と記しつつも、引用文章の場合は原文に一致させている他、方言は「那覇方言」に拠っている。

なお、この項を起こした理由の一つに、陳舜臣のレジェンド歴史時代小説「琉球の風」に尾崎秀樹の解説があつて、そこに陳自身の文として『小説といえども、歴史的経過に誤りがあつてはならない。（中略）時代を織りなす人間模様を自由に想像するのは作家の楽しみ、（後略）』の言葉に触発されたところもある。

参考にしたのは次で、小説・読物の場合は著者の資料調査が確かであると判断した場合に限り取り上げている。

「空手道・古武道基本調査報告書Ⅰ」（沖縄県教育庁文化課編集）、「空手道・古武道基本調査報告書Ⅱ」（沖縄県教育庁文化課編集）、「沖縄語辞典」（内間直仁・野原三義編著）、「空手道」（大塚博紀）、「沖縄の空手道」（長嶺将真）、「沖縄の空手・角力名人伝」（長嶺将真）、「空手名人列伝」（佐久田繁）、「本部朝基と琉球カラテ」（岩井虎伯）、小説「義珍の拳」（今野敏）、小説「武士猿」（今野敏）、小説「チャンミーグワ」（今野敏）、「琉球の風」（陳舜臣）、「南島雑話」（名越左源太著）、他に一部ウェブサイトによる。

〔五十音順〕

沖縄方言	漢字なら	説	明
アティー ハアー	当破	<p>方言で「アティー」は当てることで、的中は「アティーン」という。「ハアー」は「破」（破ること）で、二つ合わせて一撃が体を突き抜けるような威力ある突きを指している。空手技法と相まって生じる正確さと破壊力が肝心で、ただ単に腕力を振るって殴るのとは意味が違う。</p> <p>「手」（ティー。かつてあった沖縄県固有古来の拳法で、後に空手に発展昇華した。以下、手に鍵括弧を付す。）の修行は、長年にわたり形や変手（ヒンディー）の鍛錬（ナンジ）を重ね、心技体の極致に達するのが目標であった。心を練り筋骨（チンクチを）鍛えた技法が、実際にどのような威力を発揮できるのかという課題は、人体に試すことできないため、訓練課程では概念的なところがあるため、鍛錬用具の巻藁（マチワラ）訓練など実際に当てて実感する方法もあった。</p> <p>現在に至り、形や組手試合は試練と錬成の場として重要だが、試合がなかった当時の空手家たちは、常に仮想敵を念頭に置き、当破の威力に思念工夫を凝らして稽古を重ねた。各種の巻藁や鍛錬器具は、沖縄独自に創意工夫され、修行者たちは生涯を通して当破の意識を忘れなかった。</p> <p>本部朝基（1870～1944年）が、川平のタンメー（老人）から当破の威力を学ぶ場面が「武士猿」（154頁～）にあるのも興味を引かれる。</p>	
ウドゥン	御殿	<p>御殿は、琉球王国時代に王子や按司（大名）の身分にある者が住んだ邸宅である。御殿の殆どは首里城北側に建てられ、一戸当たりの広さは敷地が 3300 m²（1000 坪）、建物は 600</p>	

		<p>m² (200 坪) ほどあった。</p> <p>人びとは、御殿に住む人を直接名指しで呼ぶのを憚り、名の次に尊称として付けて使われた。</p> <p>空手界で本部御殿 (ムトゥブウドウン) といえば、第二尚氏王統第 10 代尚質王の血筋を引き、本部御殿手第 11 代宗家の本部朝勇 (1857～1928 年) であ、本部朝基は朝勇の三弟である。</p>
<p>ウチナーンチュ</p>	<p>沖縄人</p>	<p>沖縄は「ウチナー」と発音したが、本来「ウチナー」は沖縄諸島 (本島周辺) のことで、南西諸島 (宮古、八重山、尖閣の諸島) の先島と、鹿児島県の奄美群島 (1609 年の薩摩藩侵攻までは琉球国領) は含まれない。</p> <p>沖縄県の人たちは自らを「ウチナーンチュ」といったが、「チュ」は衆 (人の数が多い) で、沖縄の言葉 (方言) は「ウチナーグチ」、琉球国王が統治していた時代を「ウチナーユー」と呼んでいた。「グチ」は口で、「ユー」は世である。1879 年 (明治 12 年) 琉球処分により沖縄県となったが、それ以前は琉球国の名で独立を守っていた。</p> <p>琉球 (方言では「ルーチュー」) とは中国側からの呼び名で、その最初は唐代の 636 年に編纂された「隋書」 (中国隋代を扱った歴史書) に「流求」の名で登場する。後になって「隋書」の「流求」は台湾でないかとの説もあるが、明代に沖縄は「大琉球」、台湾は「小琉球」と呼ばれていた。それは面積の大小でなく、中国からの恩恵の多少に拠ると思われる。</p> <p>一方、沖縄の呼び名の方は、第 45 代聖武天皇 (701～56 年、在位: 724～49 年) の招請により渡日した帰化僧鑑真和上 (688～763 年、律宗の祖) の伝記「唐大和上東征伝」 (淡海三舟著、779 年成立) には、来日に際し途中で漂い着いた沖縄本島を「阿児奈波」 (オキナワ) の名で記している。</p> <p>では何故「オキナハ」「ウチナー」なのかであるが、沖縄の人たちは弥生時代以降、九州地方から移民した人たちの子孫であることから、日本古語と無関係ではない。</p> <p>伊波普猷 (1876～1947 年) は、沖あいの猟場を意味する「おき (沖) な (魚) は (場)」、東恩納寛惇 (1882～1963 年) は、「おき (沖・遠い) なは (場所)」と、両民俗学歴史学</p>

		<p>の碩学の説にあるが、定説に至っていない。⇔ヤマトウンチユー（本土の人）</p>
カキダミ シー	掛試し	<p>「カキー」は掛ける、懸かるという意味で、「タミシ」は試すこと。</p> <p>掛試し「カキダミシー」は、空手が「手」や唐手（トウデュー）と呼ばれていた時代、修行のための一行為として存在した。その頃は現代のようにルール化された試合など全くなかったわけで、あくまでも自分の力量を見極め、次なる上達に繋ぐ一手段であった。</p> <p>名が残る「手」や唐手の大家・古老の大半が、掛試しを体験したと伝承にあるから、真剣に修行に励み、自分が修行した技がいかにも実戦に役立つかを常に意識した結果からといえよう。</p> <p>その実際は、一般的には立会人を必要とし、適当な相手を探して対戦を挑み、相手に『立つか』と声掛けし、受ける場合は『立とう』と言った。</p> <p>対戦を挑むといっても相手に怪我を負わすこと余りなかったようで、コントロール意識が働いていたとみていいであろう。しかし、ルールのない立合いだから、予期せぬ場面で後遺症が残る大怪我だって覚悟しなければならない。緊張感とプレッシャーは今とは比較にならない大違いが想像できる。</p> <p>また、掛試しは喧嘩や私闘と違い、憎しみや遺恨を残すことほとんどなく、その経験を基に修行の進捗を図ろうとするのが真意であるため、世間の見る目も非難がましくなかったといわれる。</p> <p>数多の掛試しで知られた武士（ブサー）本部長基は、『相手に怪我をさせない自信がある』と公言していたという。</p>
カッシン ディー	合戦手	<p>空手と言われる以前の「手」（ディー）を修練した武人は、戦の場面における実際の闘いを前提とし、個人対多数、多数対多数など戦闘を想定した技法の訓練を行い、それを「合戦手」（カッシンディー）と呼んでいた。</p> <p>琉球王族であり、本部御殿手（ムトゥブウドウンディー）第11代宗家の本部朝勇（1857～1958年）から第12代宗家を継いだのは上原清吉（1904～2004年）で、上原が伝えた残し</p>

		た技法の中に合戦手の形がある。
ガマク		<p>「ガマク」は腰回りと思われがちだが、方言で「ガマク」の意味は腰の細くくびれた部分、腰骨の上、腰椎の脇の辺りウエストのところになる。だから、『ガマクを利かせる』又は『ガマクを入れる』と指導され、腰の使い方かと勘違いしてはならない。</p> <p>『足腰が強くなってきたことは確かだ。それはナイファンチの効果の一つだろう。足腰が盤石になることで、ガマクから上と下を分けることができる。』。これは今野敏著「チャンミーグラー」69頁にある文章である。</p> <p>後の述べる首里手（スイディー）において、ナイファンチの形が重要視された真の理由は、「ガマク」を境に上半身と下半身を別々に使い、体の左と右を別々に使う。否、別々に使えるようになるまで練りに練った鍛錬を重ねることを示唆している。ナイハンチの動作を、どこかの場面で使ってみようと思い、体の上下や左右を分けて試みても、残念ながら技にはならない、「ガマク」だって作動してくれないのでくれぐれもご注意を。ナイハンチの効用は、知らず知らずのうち（無意識）に「ガマク」を通して現れる以外にあり得ないからである。</p> <p>ナイハンチは試合で演武するタイプの形でないかもしれないが、「ガマク」を鍛えるというという意味から、是非心してほしい。最近では、ナイハンチをとことん極めた空手家は、本土には少ないのではないかと思う。</p>
キリチ	蹴る	<p>当破（アティハア）は突き技だったのに対し、蹴りは「キリチ」である。「キリケーラスン」は蹴ってひっくり返す、「キリトゥバスン」は蹴っ飛ばすで、蹴らないは「キリケーラサン」とか「キリトゥバサン」となる。</p> <p>現今、蹴りの練習にサンドバックは付き物になった。サンドバックを使用しなかった時代は、巻藁（マチワラ）の下部に縄を巻いて上足底を、適当な柱に縄など巻いて足刀や脛などを鍛えていた。筆者の場合、巻藁に上足底を当てる訓練を重ねたところ、組手練習時に足先（上足底）に目が付いているような感覚を覚えたことあった。但し、巻藁の上部を蹴る</p>

		<p>と簡単に折れてしまうので注意。突きでも蹴りでも、実際にサンドバックや巻藁などの鍛錬器具に当ててみないと分からないところがあるから、技を練るに際し心してほしい。</p> <p>晩年近くの金城 裕（1919～2013年）の談話として、同様のことが雑誌に掲載されていた。</p> <p>スポーツ空手（競技空手）では、上段蹴りを含め派手な蹴り合戦がもてはやされている。しかし武道空手においては、腰より上は蹴らないのが本筋との教えがあることに留意してほしい。現行の「空手競技規定」なら、それは反則技となってしまう。</p> <p>なお、「前蹴り」や「足刀蹴り」のような用語は本土に伝来してから生まれた言葉であり、「前蹴り」からの変形といえる「回し蹴り」が本格的に研究開発されたのは、1940年（昭和15年）頃でないかと言われている。</p>
グワー		<p>意味として、次のとおり使われる。</p> <p>① 小さいものを表し、愛称ともなる。喜屋武朝徳は「チャンミーグワー」の通称で知られるが、彼は目（ミー）が細く小さかったことから。「イングワー」は子犬、「マヤーグワー」は子猫</p> <p>② 少量の意味。「ウッピグワー」はこれっぽっち。「ウフイグワー」はちょっぴり。</p> <p>③ 人名や名称に付して親愛の意を表す。唐手グワーとか「手」グワーなど。また宮城長順（1888～1953年）が呼掛人となり、1925年沖縄唐手（当時の名称）界の諸大家が共同研究機関「沖縄唐手研究倶楽部」（会長・本部朝勇）を設立した。参加者たちは愛着を込めて「クラブグワー」と呼んでいた</p> <p>④ 見下したり、さげすむ意として使った。用例：「ブシジョーグワー」は世間知らずの者。「トゥルバヤーグワー」はぼかんとしている者。</p>

(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 藤原稜三著「格闘技の歴史」、1990年3月30日第1版、ベースボールマガジン社発行
- ・ 上地完英監修「詳説沖縄空手道」、1977年11月1日上地流空手道協会発行
- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「中山世鑑」昭和57年10月15日、沖縄県教育庁発行
- ・ 井沢元彦著「日本史集中講座」、平成19年6月20日初版、祥伝社発行
- ・ 金城昭男著「空手伝真録」（上巻）、初版平成11年7月10日、沖縄図書センター発行
- ・ 金城昭男著「空手伝真録」（下巻）、初版平成20年5月1日、(株)チャンプ発行
- ・ 埴原和郎著「日本人の骨とルーツ」、初版平成9年9月30日、角川書店発行
- ・ 諸橋轍次著「大漢和辞典（辞典）」、初版昭和32年8月25日、大修館書店発行
- ・ 大塚忠彦翻訳、楊明時監修「沖縄伝武備志」、初版1986年4月、ベースボール・マガジン社発行
- ・ 島村幸一（立正大学教授）の論文、『土佐漂着の「琉球人」』
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「空手道・古武道基本調査報告書Ⅰ」、平成6年3月30日第一刷、榕樹社発行
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「空手道・古武道基本調査報告書Ⅱ」、平成7年3月第一刷、緑林堂書店発行
- ・ 内間直仁・野原三義編著「沖縄語辞典」（副題：那覇方言を中心に）、初版2006年5月、(株)研究社発行
- ・ 大塚博紀著「空手道」第一巻（非売品）、昭和45年8月25日初版、大塚博紀記念道場維持会発行
- ・ 長嶺将真著「沖縄の空手道」、昭和50年2月10日初版、(株)新人物往来社発行
- ・ 長嶺将真著「沖縄の空手・角力名人伝」、昭和61年6月10日、(株)新報出版発行
- ・ 佐久田繁著「空手名人列伝」、1987年11月1日、月刊沖縄社発行

- ・ 岩井虎伯著「本部朝基と琉球カラテ」、平成 12 年 3 月 25 日、(株) 愛隆堂発行
- ・ 金野敏著「義珍の拳」、2009 年 5 月 25 日第 1 刷、(株) 集英社発行
- ・ 金野敏著「武士猿」、2012 年 5 月 25 日第 1 刷、(株) 集英社発行
- ・ 今野敏著「チャンワミーグワー」、2017 年 12 月第 1 刷、(株) 集英社発行
- ・ 陳舜臣著「琉球の風」上巻、2016 年 3 月 15 日、(株) 講談社発行
- ・ 陳舜臣著「琉球の風」下巻、2016 年 3 月 15 日、(株) 講談社発行
- ・ 名越左源太著、國分直一・恵良宏校注「南島雑話 1」(副題：幕末奄美民族誌)、2007 年 9 月 25 日、(株) 平凡社発行
- ・ 名越左源太著、國分直一・恵良宏校注「南島雑話 1」(副題：幕末奄美民族誌)、1984 年 3 月第一刷、(株) 平凡社発行
- ・ 名越左源太著、國分直一・恵良宏校注「南島雑話 2」(副題：幕末奄美民族誌)、1984 年 4 月 13 日第一刷、(株) 平凡社発行
- ・ 金城 裕著「唐手から空手へ」、初版平成 23 年 11 月 30 日、財団法人日本武道館発行